

# 学生図書委員だより

発行 二〇一〇年六月  
編集 学生図書委員

No.16

## 特集 奇妙な味はいかが？

短編に「奇妙な味」というジャンルがあるのをご存知ですか？ ミステリーでもSFでもない、不思議な読み心地の短編のことを、江戸川乱歩がこつ命名しました。ねじれた設定やおかしな登場人物、一筋縄ではいかない展開に、理不尽なオチ……けれども不思議な魅力があつて、はまる人ははまるという、まさに珍味的な作品ジャンルです。

日本では、阿刀田高が唯一このジャンルの代名詞的存在。筒井康隆もヘンテコな短編をいっぱい書いてますが、彼の場合は奇妙というよりは「奇天烈」ってイメージですね。最近の作家だと、乙一の『平面いぬ』『ZOO』、三崎亜記の『バスジャック』『廃墟建築士』などがこのジャンルと言えるでしょう。彼らの書く「ちょっとおかしな」話が好きって人、どうです、興味が湧きませんか？

もともとこのジャンルは欧米が発祥で、専門の書き手がいるほど。ありがたいことに、近年はこのジャンルのシリーズが日本の出版社からどばつと出ており、ミステリー寄りなのが『異色作家短編集』（全二十巻。早川書房）、SF寄りなのが『奇想コレクシオン』（続刊中。河出書房）でしょうか。一度はまるど抜け出せない人が多いジャンルだけに、作家を多数紹介してくれるシリーズがあるのは良心的ですね。しかも、どちらも装丁がカラフルでいてスタイリッシュ！ やっぱ海外の短編集はこうでなきゃね。

今月の二首

わたしたち家に着かない気がするわ

フロントガラスにぶる鱗たち

加藤治朗

光の雨に濡れながら、どこまでも続く道をただひたすら走り続けるの。

シャンデーの香りに満ちる傘の中

ほみやほぎしやいのちうなも

早川志織

冷たい雨の内側で、彼女に寄り添う僕は、そのかすかな香りに胸を衝かれる。



After  
rain  
comes  
fair  
weather

文学で行く世界旅行 no.1

## イギリス行き

イギリス文学の魅力といったら、あまりに範囲が広すぎて、もうわけがわかりません。ただ、イギリス文学の印象を漢字一字で言わせてもらおうと……『知』でしょうか。教養的にして皮肉屋、端正にして奇人。イギリスにはそういう、知識人

の格式と滑稽さの両方を感じます（あくまで個人の感想です）。イギリス文学入門におすすめるのは、『やんごとなき読者』（アラン・ベネット）。去年刊行されたばかりの新作で、結構話題になりました。主人公はなんと、現エリザベス二世！ 女王が読書にはまったものだから、さあ大変。英国王室で繰り広げられるストーリーは、風刺的でありながら温かな笑いに満ちていて、折り紙つきの面白さです。女王もとってもチャーミングで、海外文学が苦手な人もすらすら読めるライトな文章が魅力的。まさに紳士淑女の国であるイギリスらしい、品のよい笑いと教養に満ちた作品です。おすすりめ！